

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 27 日現在

機関番号：28002

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592922

研究課題名（和文） 看護学士課程における島嶼看護学教育の効果と課題に関する研究

研究課題名（英文） A Study of the Effect and Tasks in Island Nursing Education on Nursing Undergraduate Program

研究代表者

野口 美和子 (NOGUCHI MIWAKO)

沖縄県立看護大学・大学院・保健看護研究科・名誉教授

研究者番号：10070682

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、島嶼環境を活かし「島嶼から学ぶ」島嶼看護学教育の看護学士課程への導入促進に資することであった。

島嶼看護学教育の効果は、学生、教員、地域の専門職において“島嶼での理解の深まり”“島嶼看護の魅力と理解”“学習力・教育力の向上”“看護実践力・地域力への貢献”があった。課題は、“島嶼での学びの意義”を多くの大学が挙げていた。その解決に向け島嶼看護学教育内容を体系化する必要性が提言された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research was to contribute to undergraduate nursing education by using islands' unique environment.

The effects of Island Nursing Education were “deeper understanding for insularity”, “attraction and understanding of island nursing”, “development in learning and teaching abilities”, “contribution to nursing practice ability and community power”.

A task was “sense of learning in islands”. For solving the task, necessity of outlining Island Nursing Education contents was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域、老年看護学・老年看護学

キーワード：島嶼、看護学教育、学士課程

1. 研究開始当初の背景

わが国の島嶼地域には、総人口の 5%以上の人々が暮らしている。その健康課題は、高齢者の介護、子育て支援、生活習慣病など、

本土の健康問題とほぼ同様である。島嶼は狭小性・孤立性・隔絶性から、生活の全体が捉えやすく、保健医療福祉の人的・物的資源が制限されていることから関係職種の多機能

化と連携協働が求められる。そこに、地域文化を含めた生活者の視点で連携協働による健康問題の解決方法を島嶼で学ぶ意義があると考えた。

看護教育の分野では、島嶼看護学教育については看護系大学の増加に伴い、島嶼を多く有している県（長崎県、沖縄県）で島嶼をフィールドとし、保健・医療・福祉を展開する能力を養うことや、島嶼の健康問題の理解を目的とした教育が試みられていた。また、離島を含む僻地診療所に勤務する看護職を対象とした調査から、へき地（過疎地域、豪雪地帯、山村、離島など）看護活動に求められる幅広い総合的な能力、へき地に勤務する看護職のための生涯を通じた研修・サポート体制の必要性が明確にされていた。そこで、「へき地における看護の研究を推進し、日本におけるへき地看護学を確立・発展させること」を目的として平成 18 年度に日本ルーラルナーシング学会(初代理事長 野口美和子)を設立し、学会活動を継続している。しかし、我が国における基礎看護教育としての看護学士課程における島嶼看護学教育については、現状把握すらなされていない現状であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、島嶼のもつ課題に関する研究ではなく、狭小性・孤立性・隔絶性からくる生活の視点が学びやすいことや、看護職者の多機能や協働連携を学ぶことのできる教育環境を活かし、「島嶼から学ぶ」島嶼看護学教育の看護学士課程への導入促進に資することにある。

3. 研究の方法

研究方法は以下の 3 段階で実施した。

(1) 学士課程における島嶼看護学教育の現状把握（書面調査）

学士課程における島嶼看護学教育の現状把握を日本看護系大学協議会に加入している大学 181 校(平成 21 年 3 月 31 日現在)に、郵送法で書面調査を実施した。159 校（回収率 87.8%）から回答があった。調査内容は①へき地や離島の看護に関する教育について、②看護実習や演習、卒業研究などの科目による一部の学生に対するへき地や離島での指導について、③教養科目、入学時オリエンテーション、クラブ活動、学生委員会活動などでへき地や離島で学習する機会について等であった。

分析方法は調査内容ごとの質的データは類似内容をまとめ、量的データは単純集計を行った。

(2) 特徴ある島嶼看護学教育実施大学の教育実践把握（訪問面接調査）

書面調査から、へき地や離島の看護に関する教育を実践している 37 校から、研究者会議において特徴ある島嶼看護学教育実施大学を 16 校選定した。そのうち、調査の主旨に同意の得られた 13 校に訪問面接調査を実施した。

調査内容は①島嶼看護学教育の経緯と現状について、②島嶼看護学教育の影響・効果について、③島嶼看護学の課題について等であった。

分析方法は調査の逐語録から、調査内容ごとに回答内容を原文で抜き出し、キーワード、キーセンテンス化(〈 〉)と示す)して類似した内容ごとにカテゴリー化(【 】と示す)した。

(3) 看護学士課程における島嶼看護学教育導入への提言のまとめ（専門家会議開催）

島嶼看護学教育導入に向けて、研究者と専門家との専門家会議を 2 回開催した。

専門家会議への参加者は、訪問面接調査に協力した特徴ある島嶼看護学教育実施大学の島嶼看護学教育担当者及び日本島嶼学会理事長、医学部島嶼教育プログラム推進者であった。

会議の内容は、研究者チームのメンバーが研究の概要及び調査結果の説明を資料の基づきプレゼンテーションを行った後に、①島嶼看護学教育の影響・効果について、②島嶼看護学教育の課題について、③島嶼看護学教育の課題解決のための具体策について意見を自由に述べてもらった。

分析方法は会議の内容の逐語録を読み直し、専門家の意見を原文で抜き出し、キーセンテンス化(〈 〉)と示す)して類似した内容ごとにカテゴリー化(【 】と示す)した。

倫理的配慮として書面で研究趣旨を説明し、協力の依頼をする等を行った。また沖縄県立看護大学の倫理審査の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 学士課程における島嶼看護学教育の現状 ①へき地、離島に関する看護学教育を実践している大学

何らかの形でへき地、離島に関する看護学教育を実践している大学は 37 校、25 都道府県であった(図 1)。その内容は、複数回答で「看護学の科目立て又は科目の一部として教育している」(23 校)、「看護実習や演習、卒業研究などで一部の学生を離島で指導している」(17 校)、「教養科目、入学時オリエンテーション、クラブ活動、学生委員会活動などで離島・へき地で学習する機会がある」(21 校)であった。

②へき地や離島に関する看護教育の科目名と看護教育の内容

看護学の科目立て又は科目の一部教育をしている大学の、へき地や離島に関する看護教育の科目名は、30科目名あった。関連科目名でまとめると、「早期体験関連科目」、「地域看護関連科目」、「制度関連科目」、「へき地看護関連科目」、「離島看護関連科目」、「その他の看護関連科目」であった。

看護教育の内容は、【島嶼の特徴を知る】【島嶼看護活動を考える】、【健康問題を理解する】であった。

③看護教育実施上の課題

看護教育実施上の課題は、「科目の開設」「必修科目への変更」「授業時間の確保」という【カリキュラム上の課題】、「教員の理解と協力」「地域の協力体制」「事前準備の必要性」という【実施体制上の課題】、「学生の経済的負担」「学生の時間的負担」「交通機関の確保」「安全面の配慮」という【学生への支援の課題】があった。

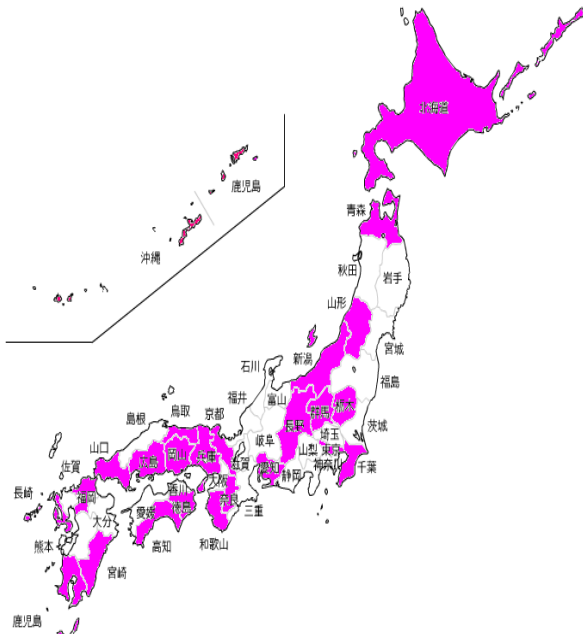


図1. へき地、離島に関する看護学教育を
実践している大学（都道府県）

④島嶼看護学教育方法のタイプ別分類

島嶼看護学教育方法のタイプ別分類は、①島嶼地域を特化して学ぶ科目と科目の一部を島嶼で学ぶ科目、②看護学生のための学びと他の学科の学生との協働の学び、③一般教養・専門基礎としての学びと看護専門としての学びのタイプに分類された。

また、GPや行政支援により島嶼看護学教育は推進されていた。

(2)特徴ある島嶼看護学教育実施大学の教育実践

訪問面接調査を実施した特徴ある島嶼看護学教育実施大学の13校は、表1のとおりであった。

表1. 訪問面接調査協力校一覧

地域	大学名
北海道地方	旭川医科大学
	札幌医科大学
近畿地方	和歌山県立医科大学
	畿央大学
中国地方	島根大学
	鳥取大学
	広島文化学園大学
九州地方	長崎大学
	長崎県立大学
	鹿児島大学
沖縄地方	沖縄県立看護大学
	名桜大学
	琉球大学

①島嶼看護学教育開始の理由

島嶼看護学教育開始の理由として【教育理念に沿う】、【島嶼看護への教員の思い】、【島嶼で活躍する看護職の人材育成】、【島嶼の地域特性(現状)の伝達】、【島嶼の有利性を活かした効果的な教育】、【看護職のあるべき姿の教育】、【島嶼看護の学問の体系化】、【実習確保の手段のみ】があった。

②島嶼看護学教育の科目の教育目的

島嶼看護学科目の教育目的は、【看護への導入】、【対象と支援方法の理解】、【地域看護の教育】、【島嶼の生活・健康・看護の理解】、【看護の本質の理解】、【看護の学びの統合】、【地域医療マインドの育成】があった。

③島嶼看護学教育の科目の教育内容

島嶼看護学教育の科目の教育内容は、【様々な場における看護の実際】、【支援の視点と協働連携】、【地域・住民の持つ特徴や文化】、【看護過程の展開】、【島嶼・へき地の看護活動の特徴】があった。

④島嶼看護学教育の効果

島嶼看護学教育の効果は、学生、教員、地域の専門職、大学、地域、そして大学全体と島嶼地域のつながりにあった。

学生への効果として、【主体的参加と学習の満足感】、【島嶼の特徴を体感】、【住民を理解し住民の力に気づく】、【島嶼看護の魅力と専門性の理解】、【看護職者としての素質の向上】、【仲間や教員との交流の機会】があった。

教員への効果として、【教育力・看護学の

陶冶】、【島嶼看護実習の価値の理解】、【島嶼への関心の探求】、【島嶼への愛着】、【大学の使命の意識】、【ジェネラリストの看護の理解】、【研究フィールドとしての価値のみ】があった。

地域の専門職への効果として、【大学との協働による看護実践の向上】、【自己の実践の捉えなおし】、【地域、地域住民に対する新たな発見】、【地域活動の活性化】、【看護実践への期待】があった。

大学全体への効果として、【島嶼での教育への関心の広がり・深まり】、【教育の質を問う機会】、【理念や地域貢献の実感】があった。

地域への効果として、【役割の獲得と楽しみ】、【島への理解の深化】、【つながりの深化と地域の活性化】、【ケアの復活と誕生】、【島の誇り】があった。

大学と島嶼地域とのつながりの効果として、【島嶼からの大学への期待と求め】、【看護の質向上に共に向かうパートナー】、【大学の地域づくりへの参加】があった。

⑤島嶼看護学教育の推進への課題

島嶼看護学教育の推進への課題として、【島嶼看護学の確立】、【カリキュラムの位置づけ】、【島嶼での効果的な学びのための教育方法の工夫】、【島嶼教育の関心の弱さ】、【島嶼地域への貢献】、【高齢化による実習継続の困難】、【学生や教員等の時間の確保】、【学生や教員等のお金の確保】、【島嶼の特性の影響】があった。

⑥課題解決のための取り組み

島嶼看護学教育の推進の課題を解決するために取り組んできたこととして、【島嶼看護研究の継続】、【教育方法の工夫】、【大学内での情報共有と相互理解】、【学習への支援体制の構築】があった。

(3)看護学士課程における島嶼看護学教育導入への専門家の意見

①島嶼看護学教育の効果

島嶼看護学教育の効果は、学生への効果と教員への効果があった。学生への効果として、【主体的参加と学習の満足感】、【島嶼の特徴の体感】、【住民を理解し住民の力に気づく】、【島嶼看護の魅力と専門性の理解】、【看護職者としての素質の向上】があった。教員への効果として、【教育力・看護力の陶冶】、【島嶼への関心の探求】、【大学の使命の意識】があった。

②島嶼看護学教育の課題

島嶼看護学教育の課題は、【島嶼看護学の確立】、【カリキュラムの位置づけ】、【島嶼での効果的な学びのための教育方法の工夫】、【学生や教員等の時間とお金の確保】、【島嶼

と他領域との教育目標の区別】、【新たな枠組みでの教育】、【島嶼看護学教育導入のための政策の検討】があった。

③島嶼看護学教育の課題解決のための具体策

島嶼看護学教育の課題解決のための具体策は、【教育方法の工夫】、【カリキュラムの位置づけの明確化】があった。

(4)看護学士課程における島嶼看護学教育導入への提言(図2)

全国の看護系大学における島嶼看護学教育に関する書面調査では、25都道府県で、「看護学の科目立て又は科目の一部としての教育」、「看護実習や演習、卒業研究など一部の学生の指導」、「教養科目、入学時オリエンテーションなどの学習機会」として教育内容に組み入れているという現状を把握した。

そして、特徴ある島嶼看護学教育実施大学の訪問面接調査では、島嶼看護学教育の効果として、学生・教員・現地の専門職にとって“島嶼での理解の深まり”“島嶼看護の魅力と理解”“学習力・教育力の向上”“看護実践力・地域力への貢献”があったことを明らかにした。課題として“島嶼の学びの意義”“カリキュラムの位置づけ”“島嶼看護学の確立”などを挙げていた。

研究者会議において、島嶼看護学教育の効果については、面接調査とほぼ同様の意見が出された。課題については、“新たな枠組みでの教育”“島嶼看護学導入のための政策の検討”が加わっていた。

島嶼看護学教育を推進するための課題解決に向け、島嶼看護に関する高度実践者の育成、教育・研究者の育成が必要であることが討議された。その結果、島嶼看護学教育内容の体系化を目指す必要性が提言された。すなわち、島嶼看護学教育の体系化に向けて、島嶼看護の実践と研究に必要な教育内容を探求確定し、看護学基礎教育としての学士課程、看護学の高度実践者育成としての博士前期課程、そして、看護学の教育者・研究者を育成する博士後期課程のそれぞれの教育プログラム(案)を提示することである。

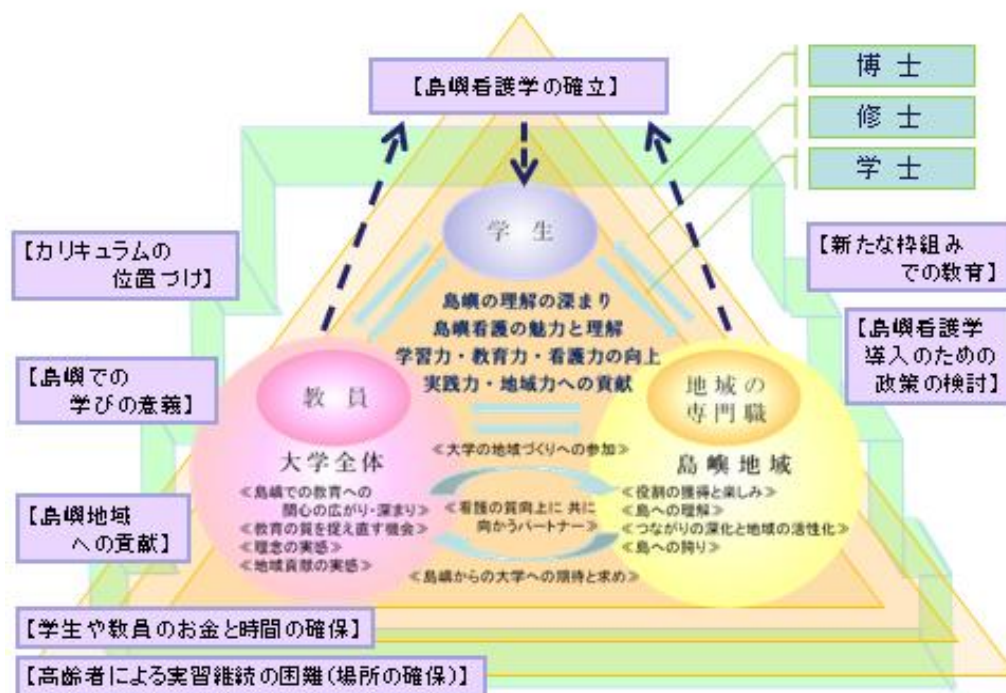


図2. 島嶼看護学教育導入への提言

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ① 大湾明美、野口美和子、植田悠紀子、石垣和子、北村久美子、山崎不二子、看護学士課程における島嶼看護学教育(第2報)－島嶼看護学教育の影響・効果と課題に関する面接調査から、－第6回日本ルーラルナースィング学会、2011、旭川
- ② 山崎不二子、野口美和子、大湾明美、植田悠紀子、石垣和子、北村久美子、看護学士課程における島嶼看護学教育(第3報)－島嶼看護学教育の科目に関する面接調査から、－第6回日本ルーラルナースィング学会、2011、旭川
- ③ 野口美和子、大湾明美、石垣和子、北村久美子、山崎不二子、看護学士課程における島嶼看護学教育(第1報)－島嶼看護学教育の現状把握に関する書面調査から、－第5回日本ルーラルナースィング学会、2010、長崎

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野口 美和子 (NOGUCHI MIWAKO)
 沖縄県立看護大学・大学院・
 保健看護研究科・名誉教授
 研究者番号：10070682

(2) 研究分担者

大湾 明美 (OHWAN AKEMI)
 沖縄県立看護大学・大学院・
 保健看護研究科・教授
 研究者番号：80185404

石垣 和子 (ISHIGAKI KAZUKO)
 石川県立看護大学・看護学部・教授
 研究者番号：80073089

北村 久美子 (KITAMURA KUMIKO)
 旭川医科大学・医学部・教授
 研究者番号：40292130

山崎 不二子 (YAMAZAKI FUZIKO)
 福岡女学院看護大学・看護学部・教授
 研究者番号：20326482

植田 悠紀子 (UETA YUKIKO)
 沖縄県立看護大学・大学院・
 保健看護研究科・教授
 研究者番号：60150166